　　　メタ認知学習法を用いた被災模擬体験に基づく防災学習法の開発

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京情報大学看護学部　小島善和

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　高柳千賀子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　内潟恵子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　成松玉委

岸田るみ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宮野公惠

【目的】想定外の大規模被災に対応できる自助・互助・共助能力の獲得を目指した被災模擬体験演習を開講し、課題設定と学習方略、目標達成度評価の妥当性を検証する。

【方法】対象は看護学部と総合情報学部の学生15名(女:7名 男:8名)で、学内施設で1泊3日の体験授業を行った。発災直前から72時間までの避難行動と避難所生活に関する課題を時系列で状況設定し、チュートリアル教育のグループ討議と実技演習を行い、土木工学、災害医療、ストレス心理学の専門家による講義を実施した。進行は、総括と補佐、チューターが行い、学生の言動は観察者が記録した。参加学生には、開講前と直後、および終了後に無記名アンケート調査を実施した。

【倫理的配慮】東京情報大学倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】学部・男女混成グループで、課題発見・解決型学習を行った。初日は、自助・互助・共助についての講義後に、グループに非常食３日分を配給し、分配や調理法の検討を行い、実際に摂取した。昼食後、東京湾北部にマグニチュード7.0の地震を想定し、訓練用Jアラートを流して避難訓練を行った。帰宅困難時の家族への連絡方法とStandard Precautions等の演習、宿泊について討議を行い、段ボールを用いた仮設ベッドを作成して体育館で試用した。夜は男女別室で寝袋を用いて宿泊した。2日目は起床後の環境整備とラジオ体操から始まり、朝食後、発災後24時間の振り返りと評価発表で積極性が見られた。また、被災後に遭遇する可能性がある紙上事例では、ハッドンマトリックスを用いて問題の特定と対応について積極的グループ討議がなされた。避難生活でのストレスコントロールはゲーム形式でのグループ討議を行い、お互いの意見に対して異なった視点での意見交換ができた。３日目は、地震の仕組みと危険回避および緊急援助活動についての講義とBLS演習を実施し、学生の関心度は高かった。

【考察】毎年実施している火災避難訓練は落下物や余震を想定していないため、学生は状況判断や自助・互助の対応に課題が見られた。今回の課題発見・対応型グループ学習では、グループ形成から機能遂行までの発展プロセスと各自が新たな知識と技術を修得しようとするメタ認知の学習効果が得られたと考える。